



気になる言葉

小樽市医師会
大本内科クリニック

大本 晃 裕

多くの方はナースステーションでの申し送りの際に、「今朝（けさ）」のことを「こんちょう」と言っているのを耳にしたことがあると思う。「けさ」というと、いかにも話し言葉のようで軽い。一方の「こんちょう」といった方がより厳かで、申し送りにはこちらの方がふさわしそうだ。十年以上前だったのだろうか、この「こんちょう」という言い方が本当に存在するのか調べたことがある。書店で大きな辞書を片っ端から引いてみたところ、一部の辞書にだけ載っていた。それには、平安時代に使われていたと書かれていた。今回改めて調べてみると、普通に辞書に掲載されており、言うまでもなく「今日の朝」のことであり、吉川英治の私本太平記にその記述があることまで事例として載っていた。また、故市川團十郎さんが記者会見で使っていたというので、歌舞伎界でも使われているのかもしれない。今、手元にある昭和47年発行の新明解国語辞典には掲載されていない。一般社会では死語になりつつあった言葉が、現代の看護師用語から次第に広まった結果なのだろうか。

同じく医療関連で使う言葉として「粘稠」という言葉がある。「粘稠な痰」とか、「過粘稠度症候群」などで使われるが、過去に「ねんちゅう」と言うのを一度も耳にしたことがない。いつも「ねんちょう」と言われている。かつて私が中学生のころ、国語のテストにおいてクラスでただ一人この読み方が正答できて先生に褒められたことがあり、自分にとってはこだわりのある言葉だ。しかし、自分が実際に「粘稠」と言わなければならない場面があったが、変な顔で見られないように敢えて「ねんちょう」と言ってしまった自分が情けなかった。蛇足ながら、稠のつくりは「周」ではなく、「土」の下が突き出た形である。

次に「発疹」。アナウンサーが「はっしん」と言うのに違和感を覚えるのは私だけではないだろう。辞書には「はっしん」と「ほっしん」の両方が載っているので「はっしん」も間違いではないが、医学界と一般社会で読み方が異なる最たる例だろう。

医療の世界に限らないが、紹介状を書くときの「小生」。使用される方は少なくないと思われるし、私も以前好んで使っていた。へりくだった表現で非常に使いやすいが、この言葉を使う上では注意が必要

だ。昔、殿様が地位の低い者に対してへりくだって使用していたことから、自分と同等か目下の人間に対して使う言葉とされている。このことは意外に知らない方が少なくないと思われ、先輩格の相手に対しては決して使ってはならない。ちなみに、この言葉は男性のみが使用できる言葉で、女性でも使えるこれに代わる言葉は存在しないという。いずれにしても「私」を使っていけば間違いはないのだが。

ここで笑い話をひとつ。昔、贈り物への礼状を書く際に、以前に頂いたある奥様が書かれた礼状を手本にし、最後に「かしこ」とつけてしまった。後日、「かしこ」は女性が使う結語であることを知ったときは赤面の至りだった。

次に「大舞台」。私は「だいぶたい」と言っていた。アナウンサーほぼ「おおぶたい」で統一されている。これについては古典芸能の世界や放送界で歴史的に紆余曲折があり、アナウンサーが「だいぶたい」と言う「おおぶたい」の間違いではないかという問い合わせが殺到したという。現在では古典芸能においては「おおぶたい」、スポーツなどの晴れの舞台では「おおぶたい」、「だいぶたい」どちらでもよいことになっている。

車の「代替」。「だいがえ」、「だいがい」と言う。「だいたい」とは言いづらいし、言ったとしても通じないかもしれない。この重箱読みは車のディーラー関係者が使っていたのが始まりで、これが徐々に広まったとのこと。辞書にも「だいがえ」は載っており、「だいがい」は「だいがえ」の誤用と記載されている。アナウンサーは法律などの「代替案(だいたいあん)」と正確に読んでいるが、車の「代替車」のことを何と読むのだろうか。

麻生外務大臣(当時)の「未曾有(みぞうゆう)」は余りにも有名だが、初めて聞いたときは格式の高い上流階級ではそういう言い方をするのかと思わず感心してしまったがやはりそうではなかった。著名な先生が、公の場で「脆弱」を「きじゃく」と言ったときは哀しくなる。私も後ろ指を指されないように精進しようと思う。

この原稿の締め切り直前にたまたま辞書の編纂に関わるNHKの番組を観た。「的を得る」は「的を射る」の誤用とされてきたが、実社会においては40パーセントの人が「的を得る」を使っているというデータや、250年前の書物にもその記載があることを見つけ出し、辞書に反映させるに至った経緯を知り、辞書に新たに載せることの大変さがよくわかった。

金田一京助の孫で春彦の子であるテレビでもおなじみの国語学者の金田一秀穂氏は言っている。「『正しい日本語』というものはない。変化するのは言葉が生きている証である」。